

# 日本語文章作成支援環境の構築

Towards Assisting Academic Writing through Information and Communication Technology

## ＜プロジェクト・メンバー＞

稲積宏誠（代表）、又平恵美子、多田知子、大野博之、勝谷紀子

青山学院大学 社会情報学部

Aoyama Gakuin University School of Social Informatics

今年度の報告にあたり、本プロジェクトの背景を改めて説明させていただき、現状での4つの取り組みについて紹介する。

展させ、「日本語」と「教育」にかかわるテーマ全般について継続的にプロジェクトを進めさせていただくこととなった。

## 1. 本プロジェクトの背景

社会情報学部は、学部発足以来1年次必修科目として「コミュニケーション基礎」を配置し、いわゆるアカデミックライティングに関する教育を行っている。これは、近年特に言われている「学生が日本語文章、特にレポート・論文が書けない」という実態を踏まえた取り組みである。このカリキュラムを考える際に驚いたのは、日本の初等教育や中等教育のなかで、国語教育、作文教育の中では、事実を事実として記述し、自分の意見は意見としてまとめる、いわゆるレポートや報告書、論文を書くという意味での「文章の書き方」を教わってこなかったことである。これは、たとえば英語を母語とする国語教育と大きく異なる点で、そこには母語に対する「ライティング」教育がきちんと存在しているのである。そこで、このような取り組みに対する後方支援的な位置づけとして、学部学生への支援としての日本語ライティング用テキストの開発、ICTによる日本語学習支援に取り組んできた。その後、その延長にある非母語話者の日本語教育支援、さらにテキストマイニングによる言葉の分析などに発

## 2. 今年度の活動の概要

### 1) ライティング教材開発について

コミュニケーション基礎のテキストは、一昨年リリースされ、毎年改定をしている。これについては、学部公開され、2年次以降、例えばゼミにおける文章作成、論文作成の参考資料としても利用されている。今年度は、演習課題の見直しと、参照環境の改善を行っている。現状の演習問題は、なるべく本学部学生の身近なテーマを扱うようにしているが、そのトピックスを変える際には、本文そのものの改定作業を行う必要がある。テキスト利用者が自由に演習課題を設計することができるなど、さらに広範囲の活用を可能とするために、テキスト本体と演習問題分離した構成にした。また、現在、電子書籍環境であるepub準拠で設計しているが、使い勝手と図などの鮮明度に難点が生じていたようである。そこで、それをKindleに対応できるように変換した。使用感の調査はこれからであるが、次年度の授業で実施するための準備は整っており、学生の利用環境がさらに改善されることになる。

## 2) 日本語教育への ICT 活用

従来から「日本語校正推敲ツール：Tomarigi」を中心に、コミュニケーション基礎の演習等でツールの利用を進めてきた。ただしこのようなツールを利用することで、自ら考えずに、ツールに頼ってしまうという傾向も見られたため、現状では授業での利用を見送っている。実際には、ライターなどの間で活用されているようである。そこで、あらためて授業内でのツール活用を検討するなかで、現在、日本語の難易度評価、自信の作成した分の評価とそれに基づく文修正のためのシステム開発を行っている。従来の取り組みの多くは、漢字や語彙によりその難易度を評価することが中心であるが、本取り組みでは、文のもつ構造情報に基づく評価システムを検討している。研究を進めるにあたっては、教科書・新聞・白書などの公開コーパスを活用することに加えて、学生のレポート文章をコーパス化して、それぞれの特徴分析を行っている。現在、基本的な処理がほぼ完成しており、今後、この活用、展開をどのように図っていくという段階である。

## 3) 非母語話者向けの日本語教育

1) 2) の派生的な側面として、非母語話者向けの展開を図っているが、それに加えて、この3年をかけて、タイ人日本語学習者の話し言葉コーパスの開発を行ってきた。この取り組みそのものは、他機関からの助成に基づくものであるが、現在そのサーバ管理を通したサービスを行うために、本プロジェクトの一部

として取り扱わせていただいている。タイは、歴史的にも親日的であり、東南アジアにおける日本語教育の拠点でもある。世界的な傾向ではあるが、近年では、外国語科目の選択において、中国語選択が増加している。やはり日本への理解を深めてもらう意味においても、海外における日本語教育支援は、続けていきたいと考えている。

## 4) テキストマイニングに活用

従来、データ分析のテーマとしてテキストマイニングを取り上げてきたが、ゼミ等での学生の反応を見ると、言葉の理解を促すという点においても重要な考え方ではないかと感じてきた。なぜなら、テキストマイニングを行うということは、形態素解析を中心とした基本的な自然言語処理の考え方を踏まえて、文章を、要素単位に見ていくということにつながる。したがって、テキストマイニングを、テキストデータを対象としたデータ分析の機能と同時に、テキストの内容を理解するための支援環境という考え方もできる。広く利用されているフリーツール：KHCoder は、人文社会系の研究者も容易に使いこなせるものであり、学生も比較的短時間で使いこなせることがわかっている。これについての普及を図るとともに、第一線のテキストマイニングの取り扱いを知るために、今年度は有償のツールの購入を図った。今後、学部学生が広くテキストマイニングにかかわれるような工夫をしていきたいと考えている。